

中年期の「生殖性 (Generativity)」の発達と自己概念との関連性について

丸 島 令 子¹

本研究は「生殖性」の発達と自己概念との関連性について、一般成人390人 (M/143, F/247) と成人患者41人 (M/23, F/18) を対象者として(1)成人期3段階における生殖性の発達、(2)中年期の自己概念の因子構造の分析、(3)「生殖性/停滞」の発達要因と自己概念の検討の3つの目的から追究する。主な結果は、1)「心理社会的バランス目録: IPB」(Domino & Affonso, 1990) を用いて一般成人を3年齢群と性による相違を検討したところ、生殖性は年齢の順に得点が高くなった。2) 中年期の自己概念の因子構造に「達成因子」と「適応因子」および「社会性因子」の3つが抽出され、それらが検討された。3) 中年群と患者群を「GHQ」により精神健康状況を査定して、2つの精神健康群(「健康群」「リスク群・患者群」)に再分類し、各群の生殖性の発達に影響を及ぼす要因を検討したところ、健康群にはほぼ自己概念の「達成」「適応」の両因子がかかわり、性差も見られたが、もう一方の停滞状況のリスク群・患者群の生殖性の発達には「適応」因子がかかわった。以上の結果から達成、適応の自己概念は中年期の心理社会的発達と有意に関連していることが示唆された。

キーワード: 生殖性, 停滞, 自己概念, 発達課題, 患者, 中年期成人

問題と目的

Erikson (1950, 1963) は個人と社会との相互作用を文脈論的にとらえた最初の段階論的発達論を示し高く評価されてきた。これまで Erikson 理論の基本命題の1つである「グランド・プラン」に関する実証的研究が試みられたが、それらの多くが自我同一性/拡散に至るまでの追究に力が注がれ、成人期の3つの段階は他の5つに比べ Erikson の説明は不足しており、なかでも中年期の生殖性/停滞のモデルについては現在も研究されることが最も少ない。

ところが Erikson は『幼児期と社会』において「本書は幼児期の諸段階に重点が置かれている。さもないれば生殖性の章が当然中心にならなければならない」(Erikson, 1950, 1963/1977, p.343) と述べ、その世代継承的連鎖の要となる成人の心理社会的発達の重要性を主張している。

Erikson によれば健康なパーソナリティの成人は生殖性の感覚 (a sense of generativity) を持ち「次世代を確立させて導くことへの関心を高める」(Erikson, 1950, 1963/1977, p.343) という世代間の関係が主張された。そして生殖性とは子孫を生み出すこと (procreativity), 生産性 (productivity), 創造性 (creativity) を包含するものであり、自分自身のさらなる同一性の開発にかかわる一種の自己一生殖 (self-generation) も含めて、新しい存

在や新しい製作物や観念を生み出すこと (generation) を表わす」(Erikson, 1982/1989, p.88) と定義された。

以上のような Erikson の定義にもかかわらず、この概念の持つ多義性は実証的研究の理論構成や概念的妥当性を難しくさせ、方法論的弱体さがしばしば指摘された (de St. Aubin & McAdams, 1995; Vaillant, 1995)。そのため生殖性の概念の深化をめぐる検討が諸家により行われている。生殖性の親であることによる「世代性 (鑑・山本・宮下, 1984)」は、生殖性概念に代表させて研究されてもいる (Snarey, Kuehne, Son, Hauser, & Vaillant, 1987; Ryff & Heinicke, 1983; 岡本, 1994; 堀内, 1993)。しかしその場合、中年期の心理社会的発達のすべてを世代関係の中に解消してしまう危惧がないとは言えない。西平 (1993) は「Erikson 理論が個人の発達を見ながら他方でその発達を世代関係の中で見る、いわば個性と関係性とのジレンマをジレンマのままその実相に目を向けた、従来の発達論の域をはるかに超えたものである」(p.95) と述べている。この点の理論化を推進しようと試みた Kotre (1984) は、生殖性について個人的形態 (agentic forms) と共同的、関係的形態 (communal forms) との次元の相違を明確にした。この考えは Erikson (1982) が生殖性概念に含蓄させた「自己一生殖」と子孫・環境への「世話・貢献」とのアナログと考えられるが、McAdams & de St. Aubin (1992) および de St. Aubin & McAdams (1995) は Kotre (1984) の考えに基づいて生殖性が個人的形態の次元の個人的欲求と他

¹ 神戸女学院大学人間科学部 maru@mail. Kobe-c. ac. jp

者や環境への貢献あるいは生殖性を発揮する対象との適応という関係的形態の関係欲求の2つに根ざしている、これらの力動的な相互作用による統合にかかわるものとして生殖性の概念の理論構成をしている。

このような生殖性概念の追究に沿ってグランドプランの発達の全体をとらえる生涯発達心理学の見地から Domino & Affonso (1990) は成人の発達研究に有効な8段階すべての評定を可能にする「心理社会的バランス目録: The Inventory of Psychosocial Balance, IPB」を開発した。彼らもまた、生殖性の概念に個性性と関係性という2つの次元の意味を組み込み、各段階が心理社会的傾倒と危機の均衡のプロセスとして特徴づけられるように尺度を構成している。この尺度はまた Erikson (1982) の漸成的発達論の検討も可能にする。つまり成人期3段階の親密性／孤立、生殖性／停滞、自我統合／絶望に焦点を置いて考えると、Erikson (1982) によれば、まず親密性が、固く結ばれた内集団の提携関係の生き方を培い、様式化する。そして「この様式の力が他者と共有する、ある生活パターンに対する確信を与え、かつそれを要求し、集会的な親密関係の中にあっても何らかの個人的同一性を保証し、1つの生産様式に対する一致団結した集団的コミットメントを1つの生き方にまとめ上げていく」(Erikson, 1982/1989, p.96)と考えられ、生殖性と親密性との密接な関係が説明されている。老年期に入ると「物事や人々の世話を何とかし終えた、このような人のみが7つの段階の果実を実らせる」(Erikson 1982/1989, p.96) が「公的地位からの引退は生殖性を求める明確な要求が減少して、中年期に慣れ親しんできた生殖的行動が不適切なものになる」(Erikson, Erikson, & Kivnick, 1986/1990, p.79) ことにより、老年期には生殖性への傾倒は幾分下降すると推定された。老年期で必要とされるのは、物事を全体の1つにまとめ上げる自我統合が提示されている。ここに Erikson (1963) は成人期3段階から生殖性の発達を示唆し、生殖性は中年期の心理社会的発達として突出した傾倒を示すと仮定した。これを1つの仮説として取り上げ検証を試みた先行研究がいくつか見出せる (Ryff & Heinicke, 1983; McAdams, de St.Aubin, & Logan, 1993)。しかし、これらの研究からは一致した見解はもたされていない。下仲ら (下仲・中里・河合, 1996) は前述の Domino & Affonso (1990) による「IPB」を用いて、中年期の危機との関連性から生殖性の発達について検討している。この研究では、Erikson が仮定したように生殖性が中年期に最も顕著な発達を示すという点が明確に検証されていない。そのため、今回の研究は

まず第1の目的としてこの点について「IPB」を採用し、成人期3段階から検討を試みる。

ところで生殖性／停滞のように各段階の傾倒と危機の葛藤解決に対するものは一般的に「発達課題」と呼ばれるが、Erikson (1982) はとくにそのようには表現していない。しかしながら Erikson (1982) は各段階に発現する素因が同調傾向もしくは失調傾向にあるか、前進か退行か、結果として適応状況にあるか不適応状況にあるかを、決定する瞬間の特質について自我の能動的な選択や積極的な取り組みが伴うことを示唆しているので発達課題と呼んでもよいだろう。そうした発達課題達成のプロセスに伴う関心、態度、行動などが意識化されるとき、個人にとって自分自身についてずっと抱いてきたイメージや特徴を規定している自己概念が、ある種の動機づけのように働くことが想定される。梶田 (1988) は「活動や体験の一部が意識化されて自己意識となるわけであるが、この段階ではまだ経験とは言いがたい。そうした自己意識のうちで重要な一部が記憶され、関連する活動や体験の記憶や意味づけなどがそれを核として組織されるという形で自己概念が成立していく。…現実は今ここで意識されているものとしての自己意識は自らに関する暗黙の前提となっている概念構造としての自己概念によって支えられ、さらにその自己概念は経験の総体によって支えられている」(p.78-79)と述べて、状況的、断片的な意識を支える安定した概念構造を提供する自己概念の機能的な役割を示唆している。とくに個人差が大きくなる中年期の成人の発達課題を考えると、彼らの自己概念の機能的な役割や作用が様々な形で影響を及ぼすことが仮定される。

そこで、次に本研究は第2の目的として中年期の自己概念の因子構造を明らかにすることをめざした。それから本研究の第3の目的である生殖性／停滞の発達と自己概念との関連性の分析を試みる。

生殖性と表裏一体をなすものとして、Erikson は停滞を仮定し、中年期の危機と考えた。中年期の危機に関連した研究の1つとして、岡本 (1985, 1994) は、Erikson の自我同一性論を取り上げ、日本の中年期成人を対象としたわが国最初の生涯発達心理学におけるデータをもたらした。岡本 (1985, 1994) は自我同一性が有機体的な段階論的発達よりも螺旋的に深化・成熟していくという仮説を提示し研究した。その結果、中年期の40歳前後と60歳前後とに体験する心身の変化による危機的時期に自我同一性の再体制化が行われていたという報告をし、中年期の心理的、身体的、生産的な限

界感が認められ、停滞感が顕在化していたと述べている(岡本, 1994, p.121)。

Erikson は停滞の危機にある中年期成人の不適応状況を「擬似的親密さを求める強迫観念的要求への退行」「停滞感と人格的貧困感の広がり」(Erikson, 1950, 1963/1977, p.344)や「自己像への強迫的な耽溺」(Erikson, 1982/1989, p.89)と考えた。これらのことは中年期成人が相互的な関心を拒否・排斥し、生み出し世話するものへのリビドー供給が著しく低下した状態による人格発達の停滞を表わしている。

ところでこのような心理社会的、身体的な不適応状況にあり、リビドー供給の低下が一般成人よりも認められるグループとして患者が想定される。従来から、中年期に発症する精神障害の病因として伝統的に退行過程や生理学的な老化過程が重視されてきたが、今日ではそれよりもむしろ、その個人のおかれた中年期の心理社会的状況に基づく葛藤が問題視されている(佐藤・茂野・滝沢, 1990)。そこで、本研究では第3の目的として患者、一般成人の両群に対して同一の指標により中年期成人の不応性を探索的に再検討する。つまり、中年期成人の精神健康度を査定して、中年期成人の発達課題の達成に影響を及ぼす要因について中年者の自己概念を構成する諸因子との関連性を分析して追究していく。

方 法

1. 測定尺度

(1) 心理社会的バランス目録

Domino & Affonso (1990) の心理社会的バランス目録(IPB: そう思う～そう思わない, の5件法)の生殖性/停滞は、個体性と関係性の両局面で「私は今までの人生で多くのことをなしたし今もしている」「後に続く世代のために計画を立てることは非常に重要である」などの項目からなる。本研究では下仲・河合・中里・長田・佐藤(1992, 1994, 1996)がDomino & Affonsoのスケールを翻訳したものをを用いて、「生殖性」に「親密性」「自我統合」を加え3段階(3下位尺度, 各15項目, 5件法)を調査した。Dominoらの研究では信頼性はCronbachの α 係数で.78～.90と高く、妥当性も検証されている。

(2) 自己概念スケール

Monge (1975) が青年期から老年期までを対象にして、生涯発達研究の見地から主因子法で抽出した4因子の自己概念では、第1因子は「達成/指導性: Achievement」で、「自信のある」「先頭に立つ」など

9項目が含まれ、有能感、自己確信、積極的行動力を示すもので、その対極は敗北者のイメージである。第2因子は「適応: Adjustment」とよばれ「満足した」「幸せな」など6項目で欲求充足したホメオスタティックなバランスのとれた自己イメージで、環境との生き生きとした関係を持つことを表わしている。その対極は孤立した欲求不満な自己像となる。第3因子は「社会性: Sociability」で「親切的」「優しい」などの4項目で、これらは社会的な刺激に対してオープンに反応する自己認知を表わし、その対極は人間嫌いという自己イメージである。第4因子は「男性性/女性性: Masculinity/Femininity」で「粗野な」「柔らかな」の2項目からなる。全部で21項目7段階評定のSD法の自己概念スケールである。

(3) 精神健康調査票

本研究は調査対象者の心理的、社会的、身体的な適応状況を知るための分類の指標としてGoldberg(1972)による「The General Health Questionnaire: GHQ」を中川・大坊(1985)が28項目の日本版、短縮版としたスケール「精神健康調査票」を用いた。「身体症状」「不安と不眠」「社会活動障害」「うつ症状」の4下位尺度(各7項目, 4件法)から構成されている。GHQの得点が高いほど精神健康上の不適応が認められる。本研究では、精神健康上の問題者をスクリーニングするときの得点法を用いた(得点範囲: 0～28点)。精神健康上の問題者の“cut-off point”は6/7点に設定されている。その他に、年齢、性、職業、教育年数、家族構成などを記載するフェースシートとともに質問紙を作成した。

2. 調査対象者および手続き

調査対象者は一般成人390人(M/143, F/247)と中年の患者41人(M/23, F/18)である。中年期の年齢範囲は「中高年雇用促進特別法」や年金受給資格の年齢を考慮して、「中年群」は45～59歳(M/76, F/148, 平均年齢51.2歳, 範囲45～59歳)とした。中年期の年齢範囲に対応して、「成人群」は25～44歳まで(M/37, F/70, 平均年齢37.8歳, 範囲25～44歳), 「高齢群」は60歳以上(M/30, F/26, 平均年齢66.8歳, 範囲60～80歳)とした。患者群は、精神科外来に通院し、神経症、うつ病、人格障害、心身症と診断された男女(平均年齢46.9歳, 範囲23歳～71歳)からなり、「GHQ」からも精神健康上の問題が認められた。

調査期間は1992年6月から1993年3月に至る。調査にあたって、中年者の集団に会うことは困難であったため、一般成人のための生涯教育公開講座、教会の集会、同窓会などに参加した人々に集会終了後質問紙を配布して2～3週間に郵便にて返送して貰った。これ

と並行して約80名の女子大生の両親に質問紙をくばり、任意で2～3週間内に郵便で返送してもらった(一般成人全体の回収率:76.5%)。患者には外来に訪れた際、医師が診察後質問紙を手渡し、2～3週間に医師が回収した(回収率:56%)。

3. 調査対象者の属性

一般成人の調査対象者の属性は以下のようなが、患者群についてはプライバシー保護の観点から調査をしていない。

＜職業＞については、男性はホワイトカラー(専門職、管理職、事務職)が多い(成人/74%:中年/82%:高齢/58%)が、高齢群ではいろいろな職業に分散している。女性は各群とも主婦が最も多いが、パート・アルバイトを含め何らかの職業についている女性は全体の約40%である。

＜教育年数＞は男女とも長い。多くが大学卒、短大卒である(平均教育年数、成人:M/15.09yrs. F/14.23, 中年:M/16.21yrs. F/13.94, 高齢:M/13.95yrs. F/11.47)。

＜家族構成＞は成人群と中年群は男女とも子供と二世代の核家族が最も多い。子供の数は3群男女とも平均2.0人である。

一般成人全体の79.50%が既婚者で、他は未婚、離別、別居、死別などで独身である。調査対象者の特徴としては職業、学歴ともに良好なバックグラウンドをもち、核家族で子供を2人くらい持っている姿がうかがえた。

結 果

1. 目的 I：成人期3段階における生殖性の発達

一般成人について、IPBの3段階の得点を従属変数として性(2)と年齢(3)の2要因分散分析を行った。親密性、生殖性、自我統合とも年齢の主効果が示された(親密性: $F[2,344]=5.32, p<.01$, 生殖性: $F[2,344]=15.38, p<.0001$ 自我統合: $F[2,344]=7.47, p<.001$)。性の主効果は親密性のみに示され($F[1,344]=7.63, p<.01$)、女性は男性より高かった。

FIGURE 1は3段階の年齢比較を図示したものである。生殖性は成人群<中年群<高齢群の順に得点が高くなった(Tukey: HSD検定: 成<中, 成<高, 中<高)。親密性は中年群が成人群より高いことが示された(成<中)。自我統合に関しては、高齢群が成人群、中年群のそれぞれよりも高かったが、成人群と中年群には相違がなかった(成<高, 中<高)。

2. 目的 II：中年期の自己概念の因子構造

Mongeの自己概念スケールの21変数に関しては、因

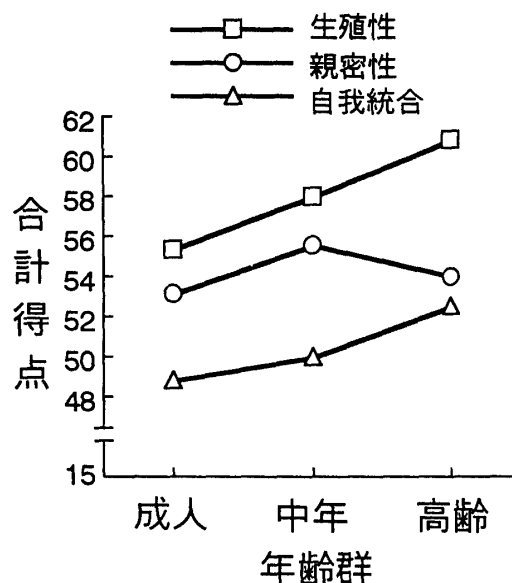


FIGURE 1 成人3段階の発達課題の得点

子分析を行う前に以下の通り項目分析を行った。具体的には、まず各項目ごとにデータが正規分布に適合するかどうかをコルモゴロフ・スミルノフの検定を用いて確かめた。その結果、すべての項目が正規分布に適合することが分かった($p<.0001$)。ついで、各項目が共通の構成概念を測定しているかどうかを確かめるため、質問項目の総得点の上位または下位約25%に属する被調査者を抽出し、t検定でGP分析を行ったところ、すべての項目に有意差が認められた($p<.0001$)。上記の項目分析の結果から全項目が自己概念について測定しているものと考え、全21項目に対する中年群男女($n=224$)の評定をもとに因子分析(因子数を指定、主因子法、promax回転)を行った。その結果、いずれも固有値 ≥ 1 以上の3因子が抽出された。

TABLE 1は中年群の因子構造を示している。「先頭に立つ/後についていく」「自信のある/自信のない」など8変数が高い負荷量を示し、「達成」因子とよぶこととする。次に「安定した/不安定な」「満足した/不満な」など7変数に高い負荷量が見られたので「適応」因子とよぶ。3番目の因子としては、対人場面で発生する自己評価と思われる「親切的な/不親切的な」「優しい/残酷な」の2変数が負荷したので「社会性」とよぶ。残る4変数(「素敵な/ひどい」「価値のある/役に立たない」「粗野な/繊細な」「堅い/柔らかい」)は負荷しなかった。従って今回、中年期の自己概念の因子構造は「達成」「適応」「社会性」の3因子からなるとみなされる。今回の研究では、先行研究の理論通りの因子構造になるのかを探索的に検討したため、分析結果として各項目がどのように3因子に負荷するのかを示し、理論との

TABLE 1 中年期成人の自己概念の因子分析結果
(promax 回転後)

No.	項目	達成	適応	社会性	共通性	Monge ⁽¹⁾
4	先頭に立つ—後に付いていく	0.79	-0.06	-0.10	0.53	Ach
9	鋭い—鈍い	0.77	-0.31	0.20	0.50	Ach
1	自信のある—自信のない	0.67	0.29	-0.29	0.66	Ach
20	機転のきく—おろかな	0.64	-0.09	0.34	0.58	Ach
3	強い—弱い	0.64	0.32	-0.27	0.65	Ach
5	落ち着いた—頼りない	0.56	0.30	-0.06	0.56	Ach
15	すぐれた—劣った	0.48	0.20	0.20	0.53	Ach
6	成功した—失敗した	0.47	0.37	0.04	0.58	Ach
17	安定した—不安定な	-0.07	0.79	0.16	0.66	Adj
19	満足した—不満な	-0.04	0.71	0.26	0.67	Adj
16	おっとりした—神経質な	-0.34	0.71	-0.07	0.32	Adj
11	幸せな—さびしい	-0.02	0.70	0.01	0.47	Adj
10	健康な—加減の悪い	0.05	0.59	-0.17	0.34	Adj
21	気分一新した—疲れた	0.23	0.51	0.11	0.53	Adj
2	良い—悪い	0.35	0.44	-0.03	0.48	Soc
13	やさしい—残酷な	0.07	0.13	0.61	0.49	Soc
18	親切な—不親切な	0.16	0.20	0.57	0.57	Soc
7	すてきな—ひどい	0.39	0.28	0.11	0.42	Soc
12	価値のある一役に立たない	0.39	0.39	0.14	0.58	Ach
14	堅い—柔らかい	0.30	-0.12	-0.02	0.06	MF
8	粗野な—繊細な	0.15	0.10	-0.41	0.15	MF
因子寄与(因子の影響を除去した場合)		2.50	2.35	1.21		
因子寄与(因子の影響を無視した場合)		6.58	6.49	2.72		
因子間相関						
		適応	—			
		達成	0.60	—		
		社会性	0.34	0.33	—	

注) Ach; Adj; Soc; MF; は, Monge の抽出した因子名

整合性を明確にする必要性があると考え、因子パターン行列を示した。しかしながら、社会性因子に関して、本来社会性因子に負荷する変数が他の因子に負荷したことと、因子寄与も低いために、今後の分析には用いないこととする。「社会性」に関しては、本研究ではあらかじめ用意した項目数が4項目と少なかったため、

2項目のみで下位尺度を構成した。下位尺度を構成する項目数が少ない場合、信頼性に欠ける恐れもあるため、通常好ましくない。しかし、自己概念スケールに関する分析は先行研究の理論との整合性を確認するために探索的に行ったものであり、新たな知見を見出すという意味では妥当な分析と考えられた。

Monge の因子構造と今回のそれと比較すると、「Ach」と「達成」は9変数のうち8変数は共通している。「Adj」と「適応」の変数もほぼ共通している(今回「Soc」の1変数が入った)。「Soc」と「社会性」では、「Soc」の残る2変数と今回とは共通しているが、1変数は負荷しなかった。Monge (1975) において「M/F」因子に負荷した2つの変数は、本研究では因子とはならず、「男性性/女性性」の因子は抽出されなかった。

以上、「Soc」の変数が分かれたが、Monge の主な因子とはほぼ共通して抽出された。なお、下位尺度の α 係数は.77～.90と十分な値が得られ、信頼性があることがわかった。

3. 目的III：生殖性/停滞の発達と自己概念との関連

(1) 精神健康3群の「IPB」「自己概念」の分散分析

中年期の停滞の危機的状況を知るために、一般成人の中年群を「GHQ」の cut-off point 7/6 点によって査定し、「健康群(M/56, F/100)」「リスク群(M/16, F/27)」に再分類した、さらに「患者群 (M/13, F/9)」とともに精神健康3群とした。以下、これら3群を対象に分析する。

TABLE 2 は精神健康3群での「IPB」「自己概念：自己概念総得点、達成因子、適応因子」を従属変数として性(2)と群(3)の2要因分散分析を行い、また有意

TABLE 2 精神健康3群別の「IPB」、自己概念の平均得点と分散分析結果

	健康		リスク		患者		N	群	性別	群×性	年齢群間差			性差
	男子	女子	男子	女子	男子	女子					健・リ	健・患	リ・患	
	(N=56)	(N=100)	(N=16)	(N=27)	(N=13)	(N=9)								
親密性	55.32	57.45	51.19	54.37	50.23	57.78	221	7.52***	11.82***	1.88	>	>	—	<
	7.04	5.80	4.69	5.46	7.19	2.64								
生殖性	58.57	58.80	55.13	56.30	51.69	57.33	221	10.29***	1.65	2.3	>	>	—	—
	6.44	5.04	3.59	4.94	7.24	3.61								
自我統合	50.84	51.28	44.75	47.96	48.62	50.00	221	13.61***	2.48	1.26	>	—	—	—
	5.43	4.67	5.25	4.99	4.98	2.92								

	健康		リスク		患者		性別群間差			群間別性差				
	男子	女子	男子	女子	男子	女子	F(2,235)	F(1,235)	F(2,235)	男	女	健	リ	患
	(N=59)	(N=110)	(N=16)	(N=28)	(N=16)	(N=12)								
自己概念	5.14	4.73	4.22	4.46	4.46	4.36	241	14.76***	8.99**	4.67*	健>リ=患		女<男	
	0.61	0.58	0.74	0.57	0.76	0.88								
達成	5.20	5.03	4.08	4.56	4.09	4.26	241	24.75***	0.01	2.82+	健>リ=患	健>リ=患		男<女*
	0.71	0.73	0.88	0.80	1.23	1.07								
適応	5.18	4.56	4.11	4.31	4.62	4.18	241	8.37***	16.15***	3.93*	健>リ=患		女<男	
	0.77	0.78	1.06	0.87	0.81	1.14								

* $p<.10$, ** $p<.05$, *** $p<.01$, **** $p<.001$

下位検定には、TukeyのHSD検定(5%水準)を用いた。

差のあったものには下位検定 (Tukey の HSD 検定) を行った結果を示している。すべての変数で群間の主効果が見られた。

「IPB」では下位検定の結果、生殖性で健康群はリスク群、患者群のいずれに対しても得点が高かった。親密性も健康群はリスク群、患者群より高かった。自我統合では健康群はリスク群よりも得点が高かった。親密性には性差が見られた (男<女)。

次に自己概念では「自己概念」と「達成」「適応」因子とも健康群はリスク群と患者群のいずれに対しても得点が高かった。

性と群の交互作用が「自己概念」と「適応」因子に示された。また「達成」因子には有意傾向が示された。FIGURE 2 は群間と年齢の比較を示したものである。性別ごとに 3 群間の平均値の違いを比較するために下位検定を行ったところ、男性の健康群において、リスク群、患者群よりも「自己概念」と「適応」因子の得点が高かった。男性、女性とも「達成」因子にも健康群はリスク群、患者群よりも得点が高い有意傾向が見られた。さらに群間別に男女の比較をすると、「自己概念」と「適応」因子では健康群は男性のほうが女性よりも得点が高かった。「達成」因子ではリスク群に女性のほうが得点の高い有意傾向が見られた。

(2) 生殖性／停滞についての重回帰分析

次に、中年期の発達課題の生殖性／停滞に自己概念がどのように影響を及ぼしているかを知るために、前項の分析で用いた中年期の「健康群」に対して、「リスク群・患者群」を停滞的、精神的不健康群とし、親密性、生殖性、自我統合の 3 段階の成人の発達課題に自己概念の「達成」と「適応」因子と性がどのようにかわっているかについて、前者を目的変数にし、後者

を説明変数にして重回帰分析を行った。なお性を入れたのは、成人期における特徴的な性差を探るためである。TABLE 3 は重回帰分析の結果を示したものである。

健康群では 3 つの発達課題ともほぼ「達成」「適応」両因子と性のすべてが組み込まれた。「生殖性」では「達成」因子に有意傾向が示された。

「リスク群・患者群」の精神的不健康群での生殖性と自我統合では「適応」因子が入った。生殖性には性に有意傾向が見られた。親密性には「達成」因子と性が組み込まれた。

考 察

1. 成人期 3 段階における生殖性の発達

今回の研究では Erikson (1982) が仮定したような生殖性のピークは中年期ではなく、「高齢群」の老年期へも段階的に発達することが示された。中年期から老年期に関しては Erikson (1982) の主張は支持されなかった。これについて考えられることは、今回の調査対象者の高齢群の平均年齢が 70 歳に満たない (M: 中年/52.6,

TABLE 3 「健康群」「リスク・患者群」の発達課題に及ぼす自己概念と性の影響 (重回帰分析結果)

群名	df	説明変数	基準変数		
			親密性	生殖性	自我統合
健康群 (n=153)	1	達成	0.29***	0.15*	0.28**
	1	適応	0.37****	0.40****	0.34***
	1	性	0.34****	0.19*	0.20**
重相関係数	(3,150)		0.35****	0.22****	0.28****
リスク・患者群 (n=63)	1	達成	0.30*		
	1	適応		0.27*	0.45***
	1	性	0.32**	0.21*	
重相関係数	(3,60)		0.28***	0.25*	0.28***

数値は、標準偏回帰係数 * $p<.10$, ** $p<.05$, *** $p<.01$, **** $p<.0001$

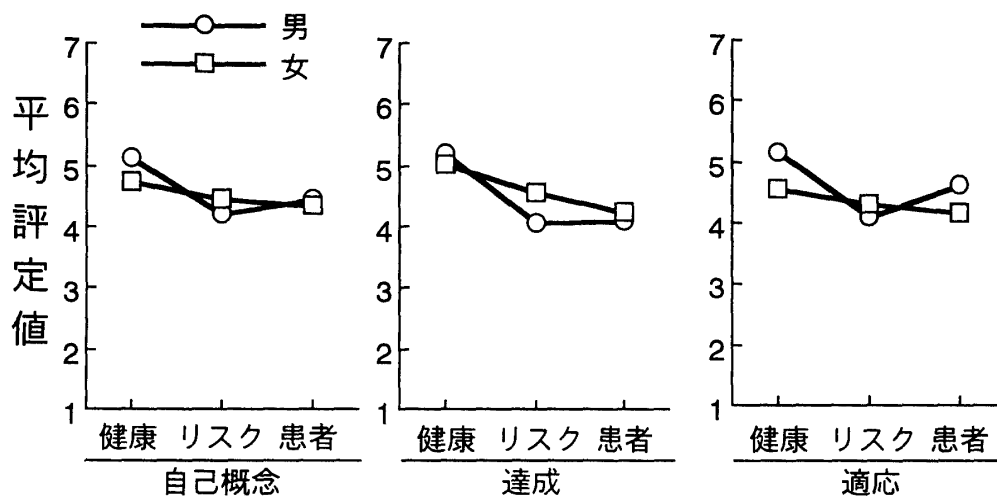


FIGURE 2 精神健康 3 群の自己概念の平均得点

高齢／67.28, F：中年／51.12, 高齢／66.40) 老年前期 (young old) にあり、この年齢の高齢者は現代では未だ社会との関係も強く老年者の意識には程遠いのかかもしれない。岡本 (1994) による定年退職期 (平均年齢 60 歳前後) の男性の「自我同一性の発達と危機」に関する研究では、定年退職に対する「積極的歓迎型」の認知タイプの人 は定年退職に伴う自己の内外の変化からくる自我同一性の危機をすでに解決していて、「(今から 10 年後の私は) 自分のやりたいことをかなりやり遂げているだろう」「公職はなくなるが、元気でこつこつ社会で役立つことに向かつて前進したい」(SCT 反応内容) など、退職後も主体的な生活を設計することが可能であると考えられた (p.203-209)。この結果は 60 歳を過ぎても生殖性概念における個体性と関係性についての関心を持続しうること を示唆している。佐方・中西 (1987) も Erikson の心理社会的発達段階目録 (EPSI) により大手電機メーカーの男性社員と教育関係の会社にパートで勤務する主婦の 20～50 歳代の女性を調査対象者に報告している。その結果では男女とも生殖性に関しては中年期 (40 歳代) から中年期後期 (50 歳代) にかけて発達していることが示された (中西, 1989)。下仲ら (下仲・中里・河合, 1996) は中年期 (30 歳～59 歳) の男女に対して中年期の危機 (仕事, 健康, 結婚関係, 子供・親との関係, 死, 自己の変化, 経済面) を測定し、最も強い危機を実年齢の世代期間内で体験した群について、「IPB」により生殖性の発達を検討しているが、生殖性は 50 歳代女性が他世代 (30 歳, 40 歳代) および同世代の男性に比べて最も高かったことを報告している。このことは危機にあっても高年齢において生殖性が発達し、女性の方がその傾向が高いことを示唆している。

Erikson (1982) の仮定が支持された研究も見出されるが、結果はそれほど強力なものではない (Ryff & Heinicke, 1983; McAdams, de St.Aubin, & Logan, 1993)。例えば、Ryff & Heinicke (1983) は成人期と老年期における人格の認知を調査するために、中年期では生殖性を重要な人格発達としてとらえ、主として世代性から生殖的自己感覚を定義して、成人前期 (M=21yrs.), 中年期 (M=48yrs.), 老年期 (M=69yrs.) の成人のおの 90 名に対して自己評価を求め測定した。その結果、中年期成人は生殖性について彼らの過去と未来よりも現在を高く評価し、成人前期の成人では現在よりも未来の中年期を、老年期成人は現在より過去の中年期を高く評価し、どの年代も生殖性は中年期において最も突出した人格発達として認知していた。しかし各群の現在の生殖性の評価点では、成人前期の成人のスコアが他の

2 群のそれらよりも高かったので、現時点では中年期成人が他よりも生殖性を達成しているとは言えないことが判明している。また McAdams et al. (1993) の成人期 3 段階における生殖性の発達についての研究からも、Erikson (1982) の仮定の支持はそれほど単純ではないことがわかる。つまり彼らの理論構成による「生殖的関心」と「生殖的行動」は中年期成人 (age-range 37-42) のスコアが成人前期 (age-range 22-27) や老年期 (age-range 67-72) のそれよりも高いことを示したが、「生殖的コミットメント」や「生殖的経験のナレーション」では中年期と老年期の両方の成人が若い成人よりもスコアが高かったのである。

このように中年以降にも生殖性が発達することに関しては、後の Erikson et al. (1986) の老年期における生殖性を「老年者は、世界を維持するための中年者の直接的な責任ある生殖性を超えて祖父母の生殖性を発揮する」(Erikson et al., 1986/1990, p.79) という説明が参考になる。つまり、今回の生殖性の尺度の項目には「われわれの子供たちが汚染された世界で育っていくことはとても心配だ」「若い人たちがやり遂げたことを見るのはとても楽しい」などが含まれていたため、伝統的に祖父母が孫に多大の関心をもつと見られているわが国の文化的な局面が高齢者の反応を刺激し、老年期に生殖性が高くなるという特徴をもたらしただのであろう。

ついで成人 3 段階から発達課題を検討したとき、親密性が中年期で最も発達した今回の結果は、Erikson が親密性と生殖性が密接な関係を持っており、「親密と孤立の対立の葛藤解決から生じる、愛、成熟した献身の相互性」(Erikson, 1982/1989, P.94) という成人期における親密性の発達から獲得された能力は、相互的な関心の活発な拡大と、生み出し、世話をするものへのリビドー供給に姿を変えてさらなる中年期の生殖性へ寄与すると説明した、漸成的な発達の局面が示唆されたと考えられる。今回自我統合は「高齢群」が最も高いが、前述の Ryff & Heinicke (1983) も、老年期成人は他の時期よりも現在に自我統合の発達を認めていると言う結果を得た。いわば“7つの段階の果実を実らせる”ことが示された。

2. 中年期の自己概念の因子構造

Bengtson, Reedy, & Gordon (1985) は生涯発達研究における多数の自己概念の構造に関する研究のなかで代表的な 3 つの先駆的研究 (Monge, 1975; Pierce & Chiriboga, 1979; Mortimer, Finch, & Kumka, 1982) をあげ、それがいずれも類似した 3 つの自己概念の因子 (personal well-being, security, adjustment: 適応, sociability, amiability:

社会性, competence, assertion, achievement: 達成) を抽出しコホート間と年齢を通じて安定しているという結果について評価している。このなかの 1 つの Monge (1975) によるスケールを今回採用したが, 中年群に絞って分析した結果は, 上記の代表的な 3 因子が抽出でき, 因子寄与の高い「達成」と「適応」因子が中年群の代表的なものと考えられる。「達成」因子については Monge によると, 男性的価値の強い性質を持ち, その一方の極は自己を有能で行動力, 指導力があり, 優れて, 強く, しかも落ち着いている, というまさに熟年の頼り甲斐のある自尊的な自己評価を示すが, もう一方の対極は, 劣った, 自信のない, 頼りない敗北者の, Erikson が生殖性の裏面として指摘した「停滞感や人格的貧困感」を表わす自己否定的な自己概念を意味する。今回の調査対象者はその属性から見て, 教育年数が長く, 専門職, 管理職につき, 生涯教育などにも自らの意思で参加し, 高等教育期の子供の親として青年期の自我同一性の確立を助ける立場にある中年者が多かったので, 彼らの多くが自らの個人的な成長と社会的な関係性の両面での自尊的な自己概念の要素を形成し保持していることが考えられる。反面, 自己否定的で, 社会的なコミットメントに失敗し, 人間嫌いに陥っている中年者の潜在も示唆している。

ほぼ同じくらいの因子寄与が示されたもう 1 つの「適応」因子は, ホメオスタティックな欲求を充足し環境に対して能動的で, しかも内面的, 心理的な均衡を保つことができる自己の局面を表わすものとされる。Monge (1975) は「適応」「達成」の両因子は相互作用的に自己概念を形成することによって人格のバランスを取ろうとすると述べている。実際, 今回の研究で達成因子と適応因子の相関は高い($r=.60$)。つまり肯定的な自己を支えるものは, 幸福感, 満足感を自己イメージの要素としてもつことによるのである。この点からも今回, 中年者の自己概念の中心として, 高い自己評価と満足的で健康な自己イメージが表裏一体として示された反面, 低い自己評価と欲求不満で精神的に不健康な自己イメージの存在も示された。

上記の達成因子と適応因子に比べて「社会性」は強力なものとしては示されなかった。今回「社会性」因子の変数としては“優しい—残酷な”“親切的な—不親切的な”に高い負荷が見られた。すくなくともこれらは人間関係という社会的刺激に対してわが国の中年者が主として示す反応であることを示唆している。

3. 生殖性／停滞の発達と自己概念との関連

(1) 精神健康 3 群の特徴

中年期の停滞的状况を知るために, 実際に精神健康に何らかの障害を持ち, 治療中の患者らに加え, 一般成人の中年群の精神健康を査定した。その結果彼らの中には精神健康的に不適応な中年者が 27.56% 認められた。これら停滞的な中年者の中には表面的には多分, 普通の日常生活を営み, 生涯教育の公開講座や集会にも参加していた。彼らリスク群を患者群と比較してみたが, 発達課題および自己概念の得点で, 両者はあまり相違がなく, よく似た特徴を示していた。3 段階の発達課題では, これら中年群は健康な中年群に比べて発達課題の達成は低い。従って中年期の停滞傾向が考えられる。

自己概念について考えると, 発達課題の達成が良好な健康的な中年群は自己肯定的, 自尊的でまた環境との関係から幸福感, 満足感に満たされた自己概念を持ち, そうした, 自己イメージを持つ中年者は比較的男性の方が女性より多い。その対極に「停滞と人格的貧困感の広がり」のモデルの群像がリスク群として浮かび上がり, 患者の予備群であるかもしれない。反面, 患者がリスク群とあまり変わらないことは, 精神健康上の問題に対して病院治療やカウンセリングの効果が認識される。

このように, 今回中年期に精神健康上の危機を示し, 発達課題の取り組みや自己像に問題をもつ人々の存在が判明したが, それは必ずしも病的な状態に結びつくとは限らないであろう。今回の結果は, Levinson (1978/1992) が発達期 (安定期) と過渡期の概念で示したように, 過渡期における危機のときは, むしろ次により満足のいく生活構造を築き統合的な心理的安定感を獲得するための正常な発達段階とみることも可能であろう。また岡本 (1994) の研究によるアイデンティティ発達のプロセスが示すような再体制化の過程のあるモーメントを含蓄しているのかもしれない。

(2) 生殖性／停滞の発達に影響を及ぼす要因

このようにリスク群は患者群とよく似た特徴を示したため, 健康群と対比して停滞的な中年群とみなし, リスク・患者群という一群に取り扱い検討した。その結果, 自己概念の「達成」と「適応」の両因子は発達課題の達成へ方向づける働きをしていることが示唆された。つまり生殖性について見ると, 健康な中年者では両因子が比較的まとまりを持ってかわり, 停滞的な中年者には「適応」因子がかかわったため, 「達成」「適応」因子を中心とした中年期の自己概念の構造はその心理社会的発達に大きな意味を持つものと考えられる。

漸成論的な見地から考えると、健康な中年者の良好な生殖性の発達には、親密性に対しても、また自我統合に対しても、「達成」「適応」の2つの自己概念因子が寄与すると考えられる。このことはMonge(1975)が「達成」と「適応」の両因子は相互に関係しあって働くと説明したように、今回、健康的な成人のもつ自己概念の2つの因子は一体となって発達課題の達成に働いていた。性差については、親密性、自我統合とも女性の方が発達課題の達成は良好であるが、生殖性には男性の方が女性よりも良好であった。その理由は多分現在の日本の社会では中年期の男性は女性より、より広範囲な社会との関係を持つ傾向がみられるからであろう。Eriksonのいう「世界の維持的生殖性」は、今日なお男性のコミットメントの方が多いと思われる。

もう一方の停滞的な中年者では生殖性にはホメオスタティックな充足感、環境との関係性に満足感を抱く適応因子が中心となって作用していた。de St. Aubin & McAdams (1995) は「生殖的関心」と「生殖的行動」という彼らの概念構成と関連してJackson (1976) による「人格研究質問票 (PRF)」における「達成」「社交性」「指導性」「奉仕と世話」という4つの人格的要素との有意な相関関係を導いている。このことから彼らは生殖性の概念が個性性と関係性の両側面のまとまりを必要とすると推測した。なぜなら「達成」と「指導性」が個性性と、「社交性」と「奉仕と世話」は関係性にとそれぞれ関連が見られたからである。さらに彼らはCosta & McCrae (1988) らの5つの人格特性との関係も調査し、生殖的関心は「神経症性」「外向性」「開放性」「協調性」と相関しており、生殖的行動は「外向性」と「開放性」とに相関していることを発見した。

このような今回の適応因子は上記のCosta らの「開放性」と共通した面があり、こうした人格特性を持つならば、精神健康上の問題があっても生殖性を発揮する可能性が考えられる。しかしこれらの中年者にはさらなる「自己一生殖性」の局面における個性性の発達や同一性の再体制化が課題となる。彼らの親密性および自我統合の発達に関しては、親密性は自尊的な達成因子がかかわり、自我統合には生殖性と同じように満足感をもつ適応因子が寄与している、というように2つの因子はまとまりを持ってかかわっていない。この点が健康的な中年群との大きな相違と考えられる。

ところで先行研究の中に「生活満足感」「幸福感」「親となったことの満足や幸福感」と生殖的行動との関係が調査されたものがあるが、それらは関連していない結果をもたらしている (de St. Aubin & McAdams, 1995)。

その理由として生殖的行動はわずらわしい人間関係に取り組むことであり、親となることは多くの苦勞が伴いそのため幸福感が低下するものと考えられた。このことは生殖性の発達には単に幸福感や生活満足感につながるだけではない人生の意味や目的に通じる高い次元を含蓄した概念であることが理解され、質問紙法のみでは調査しきれない面を今後検討する必要性を示唆している。それとともに今回の研究では網羅しえなかった個々の中年者が経験する多様なライフイベントと危機の関連性や、わが国の文化社会的背景に基づく中年者に対する役割期待のような文脈論的な観点からの検討も今後の課題となる。

引用文献

- Bengtson, V.L., Reedy, M.N., & Gordon, C. 1985 Aging and self-conceptions: Personality processes and social contexts. In Birren, J.E., & Schaie, K.W. (Eds.), *Handbook of the psychology of aging*. (2nd Ed.) N.Y.: Van Nostrand Reinhold Co. Pp.544—593.
- Costa, P.T., & McCrae, R.R. 1988 Personality in adulthood: A six-year longitudinal study of self-reports and spouse ratings on the NEO Personality Inventory. *Journal of Personality and Social Psychology*, **54**, 853—863.
- Domino, G., & Affonso, D.D. 1990 A personality measure of Erikson's life stages: The Inventory of Psychosocial Balance. *Journal of Personality Assessment*, **54** (3 & 4), 576—588.
- Erikson, E.H. 1950, 1963 *Childhood & society*. N. Y. W.W. Norton & Company. (仁科弥生訳 1977 幼児期と社会 I .II. みすず書房)
- Erikson, E.H. 1982 *The life cycle completed*. N. Y. W.W. Norton & Company. (村瀬孝雄・近藤邦夫訳 1989 ライフサイクル, その完結 みすず書房 Pp.69—104.)
- Erikson, J.M., Erikson, E.H., & Kivnick, H.Q. 1986 *Vital involvement in old age*. N.Y. W.W. Norton & Company. (朝長正徳・朝長梨枝子訳 1990 老年期 みすず書房)
- Goldberg, D.P. 1972 *The detection of psychiatric illness by questionnaire, a technique for the identification and assessment of non-psychiatric illness*. London: Oxford University Press.
- 堀内和美 1993 中年期女性が報告する自我同一性の

- 変化—専業主婦、看護婦、小・中学教師の比較—
教育心理学研究, **41**, 11—21.
- Jackson, D.N. 1976 *Jackson Personality Inventory Manual*. Goshen N.Y. Research Psychologist Press.
- 梶田叡一 1988 自己意識の心理学 東京大学出版会
- Kotre, J. 1984 *Outliving the self : Generativity and the interpretation of lives*. Baltimore, MD: Johns Hopkins University Press.
- Levinson, D.J. 1978 *The seasons of a man's life*. New York : Knopf. (南 博訳 1992 ライフサイクルの心理学 講談社)
- McAdams, D.P., & de St. Aubin, E. 1992 A theory of generativity and its assessment through self-report, behavioral acts and narrative themes in autobiography. *Journal of Personality and Social Psychology*, **62**, 1003—1015.
- McAdams, D.P., de St. Aubin, E., & Logan, R.L. 1993 Generativity among young, midlife, and older adults. *Psychology and Aging*, **8**(2), 221—230.
- Monge, R.H. 1975 Structure of the self-concept from adolescence through old age. *Experimental Aging Research*, **1**(2), 281—291.
- Mortimer, J.T., Finch, M.D., & Kumka, D. 1982 Persistence and change in development : The multidimensional self-concept. In P.B. Baltes & O.G. Brim, Jr. (Eds.), *Life-span development and behavior*. N.Y.: Academic Press. vol.4, Pp.263—313.
- 中川泰彬・大坊郁夫 1985 日本版 GHQ 精神健康調査票(手引き) 日本文化科学社
- 中西信男(編) 1989 人間形成の心理学 ナカニシヤ出版 Pp.107—110.
- 西平 直 1993 エリクソンの人間学 東京大学出版会
- 岡本祐子 1985 中年期の自我同一性に関する研究 教育心理学研究, **33**, 295—306.
- 岡本祐子 1994 成人期における自我同一性の発達過程とその要因に関する研究 風間書房
- Pierce, R.C., & Chiriboga, D.A. 1979 Dimensions of adult self-concept. *Journal of Gerontology*, **34**, 83—85.
- Ryff, C.D., & Heinicke, S.G. 1983 Subjective organization of personality in adulthood and aging. *Journal of Personality, and Social Psychology*, **44**, 807—816.
- 佐方哲彦・中西信男 1987 成人期の同一性発達に関する研究(一)—EPSIによる発達課題の達成意識の変化の検討— 日本心理学会第51回大会発表論文集, 549.
- 佐藤哲哉・茂野良一・滝沢謙二 1990 中年期の発達課題 飯田 眞(編) 中年期の精神医学 医学書院 Pp.1—3.
- 下仲順子・河合千恵子・中里克治・長田由紀子 1992 老年期の心理社会的発達—自我統合と心理的適応— 日本心理学会第56回大会発表論文集, 54.
- 下仲順子・中里克治・河合千恵子・佐藤真一 1994 老年期の心理社会的発達—性役割, 社会化と自我統合— 日本心理学会第58回大会発表論文集, 363.
- 下仲順子・中里克治・河合千恵子 1996 中年期の危機と心理社会的発達 日本心理学会第60回大会発表論文集, 322.
- Snarey, J., Kuehne, V.S., Son, L., Hauser, S., & Vaillant, G.E. 1987 The role of parenting in men's psychosocial development : A longitudinal study of early adulthood infertility and midlife generativity. *Developmental Psychology*, **23**(4), 593—603.
- de St. Aubin, E., & McAdams, D.P. 1995 The relations of generative concern and generative action to personality traits, satisfaction / happiness with life and ego development. *Journal of Adult Development*, **2**, 99—112.
- 鑑幹八郎 1984 同一性概念の広がりとは基本構造 鑑幹八郎・山本 力・宮下一博(編) アイデンティティ研究の展望 I ナカニシヤ出版 Pp.55—56.
- Vaillant, G.E. 1995 The ego and adult development. *The wisdom of the ego*, 5th Chapter. Cambridge, MA : Harvard University Press. Pp.141—174.

付 記

本論文は、1992年度に京都大学大学院教育学研究科に提出した修士論文の一部を加筆修正したものです。本論文の作成にあたり、ご指導頂きました京都大学名誉教授、齋藤久美子先生に深く感謝いたします。また、患者群のデータの収集にあたり、ご協力下さいました医師、木村 智先生に厚くお礼申し上げます。

(1998.10.19 受稿, '99.9.17 受理)

Relation of Generativity to Self-Concept Among Middle-Aged Adults

REIKO MARUSHIMA (DEPARTMENT OF HUMAN SCIENCES, KOBE COLLEGE) JAPANESE JOURNAL OF EDUCATIONAL PSYCHOLOGY, 2000, 48, 52–62

The present study investigated the relation of generativity to self-concept among 390 adults (143 males, 247 females) not receiving mental health services, and 41 clients (23 males, 18 females), through examining 3 objectives : (1) development of generativity within 3 psychosocial adult stages, (2) factor analysis of self-concept using data from the non-clients, and (3) self-concept affecting generativity vs. stagnation. The main results were as follows : (1) when the Inventory of Psychosocial Balance (IPB : Domino & Affonso, 1990) was administered to the adults, age×sex differences in scores on the developmental tasks revealed that generativity developed in relation to age ; (2) 3 factors of self concept—achievement, adjustment, and sociability—emerged and were interpreted ; (3) the subjects in the non-client group and the clients were classified into 2 mental health groups assessed by the General Health Questionnaire (GHQ). Substantially 2 self-concept factors—achievement and adjustment—affected development of generativity in the non-client group, whereas the factor of adjustment affected the (risky) client group. This result implies that a self-concept of achievement and adjustment is significantly related to the individual psychosocial development of middle-aged adults.

Key Words : generativity, stagnation, self-concept, developmental tasks, clients, middle-aged adults